

老獸医

伊藤左千夫

青空文庫

糟谷獣医は、去年の暮れ押しつまつてから、この外手町へ越してきた。入り口は黒板べいの一部を切りあげ、形ばかりという門がまえだ。引きちがいに立てた格子戸二枚は、新しいけれど、いかにも、できの安物らしく立てつけがはなはだ悪い。むかつて右手の門柱に看板がかけてある。板も手ごしらえであろう、字ももちろん自分で書いたものらしい、しろうとくさい幼稚な字だ。

「家畜診察所」

とある大字のわきに小さく「病畜入院の求めに応じ候」と書いてある。板の新しただけ、なおさら安っぽく、尾羽打ち枯らした、糟谷の心のすさみがありありと読まれる。あがり口の浅い土間にあるげた箱が、門外の往來から見えてる。家はずいぶん古いけれど、根継ぎをしたばかりであるから、ともかくも敷居鴨居の狂いはなさそうだ。

入り口の障子をあげると、二坪ほどの板の間がある。そこが病畜診察所兼薬局らしい。さらに入院家畜の病室でもあろう、犬の箱ねこの箱などが三つ四つ、

すみにかさねあげてある。

ほかに六畳の間が二間と台所つき二畳が一間ある。これで家賃が十円とは、おどろくほど家賃も高くなつたものだ。それでも他区にくらべると、まだたいへん安いといつて、糟谷はよろこんで越してきたのである。

糟谷は次男芳輔三女礼の親子四人の家族であるが、その四人の生活が、いまの糟谷の働きでは、なかなかほねがおれるのであつた。

平顔の目の小さいくちびるの厚い、見たとおりの好人物、人と話をするにかならず、にこにこと笑つてゐる人だ。なにほど心配なことがあつても、心配ということを知つていそうなふうのない人である。

細君はそれと正反對に、色の青白い、細面なさびしい顔で、用談のほかはあまり口はきかぬ。声をたてて笑うようなことはめつたにない。そうかといつて、つんとすましているというでもない。

それは、前途におおくの希望を持った、若い時代には、ずいぶんいやにすました人だといわれたこともあつた。実際、気位高くふるまっていたこともあつた。しかしながらいまのこの人には、そんな内心にいくぶん自負しているというような、気力は影もとど

めてはいない。きどつて黙だまっていた、むかしのおもかげがただその形かたちばかりに残のこつてゐるのだ。

天性てんせい陰気いんきなこの人は、人の目にたつほど、愚痴ぐちも悔くやみもいわなかつたものの、内ないし心こころにはじつに長いあいだの、苦悶くもんと悔かい恨こんとをつづけてきたのである。いまは苦悶くもんの力ちからもつきはてて、目に気張きばりの色も消えてしまった。

生まれが生まれだけにどことなし、人柄ひとがらなどころがあつて、さびしい面おもざしがいつそうあわれに見える。もうもう我が世はだめだとふかくあきらめて、なるままに身をも心をもまかせてしまったというふうである。それでもさすがに、ここへ移うつつてきた夜は、だれにいうとはなく、

「引ひつ越こすたびに家が小さくなる」

とひとりごとをくりかえしておつた。

糟谷かすやはあければ五十七才になる。細君さいくんはそれより十一の年下とかいつた。糟谷ほんじは本所よへ越こしてきて、生活の道が確立かくりつしたかというに、まだそうはいかぬらしい。

糟谷かすやが上京じょうきやう以来いらい来たえず、同情どうじやうを寄よせて、ねんごろまじわつてきた、当区とうくの畜産ちくさん家か西田にしだという人が、糟谷げんじやうの現げんじやう状じやうを見るにしのびないで、ついに自分の手近てぢかに越こさし

たのであるが、糟谷が十年住んでおった、新小川町のとにかく中流の住宅をいでて、家賃十円といういまの家へ移つてきたについては、一場の悲劇があつた結果である。

二

糟谷は明治十五年ごろから、足掛け十二年のあいだ、下総種畜場の技師であつた。そのころ種畜場は農商務省の所管であつた。糟谷は三十になつたばかり、若手の高等官として、周圀から多大の希望を寄せられていた。

新しい学問をした獣医はまだすくない時代であるから、糟谷は獣医としても当時の秀才であつた。快活で情愛があつて、すこしも官吏ふうをせぬところから、場中の気受けも近郷の評判もすこぶるよろしかった。近郷の農民はひいきの欲目から、糟谷は遠からずきつと場長になると信じておつた。

糟谷は西洋葉巻きを口から離さないのと、へたの横好きに碁を打つくらいが道楽であるから、老人側にも若い人の側にもほめられる。時間のゆるすかぎり、糟谷は近郷の人の依頼に応じて家畜の疾病を見てやつていた。職務に忠実な考えからばかりで

はないのだ。無邪気な農民から、糟谷さん糟谷さんともてはやされるのが、単調子の人よしの糟谷にはうれしかつたからである。

梅の花、菜の花のどかな村むらを、粟毛に額白の馬をのりまわした糟谷は、当時若い男女の注視の焦点であった。糟谷は種畜場におつて、公務をとるよりは、村落へでて農民を相手に働くのが、いつも愉快に思われてきた。そうしてこういうことが、自己の天職からみてもかえつてとうといのじやないかなど考えながら、ますます乗り気になつて農民に親しむことをつとめた。

糟谷はでるたびにいく先ざきで、村の青年らを集め、農耕改良はかならず畜産の発達にともなうべき理由などを説き、文明の農業は耕牧兼行でなければならぬということなどをしきりに説き聞かせ、養鶏をやれ、養豚をやれ、牛はかならず洋牛を飼えとすすめた。人望のあつた糟谷の話であるから、近郷の農民はきそつて家畜を飼うた。

糟谷はこのあいだに、三里塚の一富農の長女と結婚した。いまの細君がそれである。細君の里方では、糟谷をえらい人と思ひこみ、なお出世する人と信じて、この結婚を名誉と感じてむすめをとつがし、糟谷のほうでもただ良家の女ということがたく

て、むぞうさにこの結婚は成立した。それで男も女も恋愛に関する趣味にはなんらの自覚もなかつた。

精神上からみると、まことに無意味な浅薄な結婚であつたけれど、世間の目から羨望の中心となり、一時近郷の話題の花であつた。そして糟谷夫婦もたわいもない夢に酔うておつた。

三

過渡期の時代はあまり長くはなかつた。糟谷が眼前咫尺の光景にうつつをぬかして
いるまに、背後の時代はようしやなく推移しておつた。

札幌農学校や駒場農学校あたりから、ぞくぞくとして農学上獣医学上の
新秀才がでてくる。勝島獣医学博士が駒場農学校のまさに卒業せんとする
数十名の生徒をひきいて種畜場參觀にこられたときは、教師はもちろん生徒にい
たるまで糟谷のごときほとんど眼中になかつた。

糟谷が自分の周囲の寂寥に心づいたときはもはやおそかつた。糟谷ははるかに時

代の推移すいから取り残のこされておつた。場じょう長の位置いちを望のぞむなどじつに思いもよらぬことと思われてきた。いまの現げん在ざいの位置いちすらも、そろそろゆれだしたような気がする。ものに屈くつ託たくするなどいうことはとんと知らなかつた糟谷そうやも、にわかかに悔かい恨こんの念ねん禁きんじがたく、しばしば寝ねられない夜もあつた。糟谷そうやはある夜また例れいのごとく、心細しあんい思案しあんにせめられて寝ねられない。

なるほど自分おれはうかつであつた。国家こくがのためということを考えて働はたらいた。畜産界ちくさんかいのためということも考えて働はたらいた。人民じんみんのためということも考えて働はたらいた。けれどもただ自分おれのためということは、ほとんど胸きょう中ちゆうになく働はたらいておつた。なんといううかつであつたろう。もうまにあわない、なにもかもまにあわない。

糟谷そうやはこう考えながら、自分おれには子どもがふたりあるということことを強つよく感じて、心持こころちよく眠ねむっている妻さい子しをかえりみた。長男ぎいち義一ぎいちはふとつてつやつやしい赤あかい顔かほを、ふとんから落おとしてすやすや眠ねむっている。妻つまは三さんつになる次男じなんを、さもかわいらしむねそうに胸むねに抱だきよせ子どものもじやもじやした髪かみの毛けに、白しろくふつくらしむねした髪かみをひつけてなんの苦くもない面持おもちに眠ねむっている。糟谷そうやはいよいよさびしくてたまらなくなつた。

自分おれになんらの悪気わるきはなかつたものの、妻つまが自分おれにとつぐについては自分おれに多た大だいな望のぞみ

を属しよくしてきたことは承知しやうちしていたのだ。そうことばの穂ほにでたときにも、自分は調子ちやうしにのつて気休きやすめをいうたこともあったのだ。

結婚けつこん当時とうじからのことをいろいろ回想かいそうしてみると、妻つまに対しての気のどくな心持こころもち、しゆうとしゆうとめに対して面めん目ぼくない心持こころもち、いちいち自分をくるしめるのである。かれらが失望しつぼう落胆らくたんすべき必然ひつぜんの時期じきはもはや目のまえに迫せまっていると思うと、はらわたが煮にえかえつてちぎれる心持こころもちがする。自分はなんらおかしな罪つみはないと考えても、それがために苦痛くつうの事実じじつが軽かるくなるとは思えないのだ。

糟谷かすやはまた自分の結婚けつこんするについてもその当時とうじあまりに思慮しりよのなかつたことをいまさらのごとく悔くいた。家とか位置いちとかいうことを、たがいに目安めやすにせず、いわば人と人との結婚けつこんであつたならば、自分の位置いちに失望しつぼう的な変遷へんせんがあつたにしろ、ともにあいあわれんで、夫婦ふうふというものの情合じやうあいによつて、失望しつぼうの苦くも慰なぐさむところがあるにちがいないだろうが、それがいまの自分にはほとんど望のぞみがないばかりでなく、かえつて夫婦間ふうふかんにおこるべきいやな、いうにいわれない苦痛くつうのために、時代に捨すてらるるさびしさがいつそう苦しいのである。それもこれも考えればみな自分のうかつから求めたことでもまぬがれようのない、いわゆるみずから作つくれるわざわいだ……。

恋愛れんあいなどということただただかけてるとばかり思っていたが、恋愛のとほしい結婚はじつにばかげておった。ばかげているというよりも、いまはそのあさはかな結婚のために、たまらないやなくなるしみをせねばならぬことになった。

こう思つて糟谷かすやはまた妻つまや子の寝姿ねすがたを見やつた。なにか重いものでしつかりおさえていられるように妻つまや子どもは寝入ねいつてゐる。

いよいよ自分も非職ひしよくとなり、出世しゅつせの道がたえたときまつたら、妻はどうするか、かれの両親はどういう態度たいどをするか、こういうときに夫婦ふうふの関係かんけいはどうなるものかしら。いつそのこと別わかれてしまえばかえつて気は安いが、やはり男の子ふたりのかすがいが不本ふほん意いに夫婦をつないでおくのだろう。

「しようがないから」「どうすることもできないから」「よんどころないからあきらめてゐる」というような心持ちで、いかにもつまらない冷ひややかな家庭を作つていねばならないのか、ああ考えるのもいやだ……。

うつかりして過渡期かどきの時代におつたというのが、つまり思慮しりよがたらなかつたのだ……。ここをやめたからとて、妻子さいしをやしなつてゆくくらいにこまりもせまいが、しかたがない、どうなるものか益えきのない考えはよそう。

考えにつかれた糟谷は、われしらずああ、ああと嘆声をもらした。下女がおきるなど思ってから、糟谷はわずかに眠った。

四

翌朝はようやく出勤時間にまにあうばかりにおきた。よほど顔色がわるかつたか、

「どうかありませんか」

と細君がとがめる。糟谷はうんにやといったまま井戸端へでた。食事もしそいで出勤のしたくにかかると、ふたりの子どもは右から左から父にまつわる。

「おとうさん、おとうさん」

「とんちゃん、とんちゃん」

糟谷はきょうにかぎって、それがうるさくてたまらないけれど、子煩悩な自分が、毎朝かならず出勤のまえに、こうして子どもを寵愛してきたのであるから、無心な子どもは例のごとく父に可愛いがられようとするのを、どうもしかりとばすこともできな

い。

「きようは遅いからいそぐだ」

とすこしむずかしい顔をして子どもは聞き入れそうもしない。糟谷はますますむしゃくしゃして、手をだす気にもならない。

「ねいあなたたちよつと抱いてやってくださいな、ほんのすこし、ねいあなたたちよつと」

細君から手移しに押しつけられて、糟谷はしようことなしに笑って、しようことなしに芳輔を抱いた。それですぐまた細君に返した。糟谷はこのあいだにも細君の目をそらして、これら無心の母子をぬすみ見たのである。そうしてさびしいはかない苦痛が、胸にこみあげてくるのである。心臓の動悸が息のつまるほどはげしく、自分で自分の身がささえていられないようになった。糟谷は、

「もう遅いっ」

とおちつかないそぶりをことばにまぎらかして外へでた。外へでるがいなや糟谷は涙をほろほろと落とした。いますこしのところで妻に涙を見られるところであつたと、糟谷は心で思った。

糟谷は事務所の入り口で小使を見た。小使はいつもていねいにあいさつするのだが、

けさはすぐわきをとおりながらあいさつもせずについてしまった。糟谷はいやな気持ちがあった。事務所へはいつてみると、場長はじめ同僚までに一種の目で自分は見られるような気がする。いつもは、

「糟谷さんこうしてください」とか、

「これはこれしておきましようかね」

とか、うちとけてむぞうさというところも、みようにあらたまつて命令的に事務の話をするのである。糟谷はもうおちついて事務がとれない。

あるいは非職の辞令が場長の手許まできてもいやせぬかとも考える。まさかにそんなに早くやめられるようなこともあるまいと思ひなおしてみる。糟谷はへいきで仕事をし、てるようなふうをよそおうて、机にむかっているときにはわかりきつてることをわざわざ立つていつて同僚に聞いたりしてゐる。

場長が同僚と話をしているのに、声が低くてよく聞きとれないと、胸騒ぎがする。そのかんにも昨夜考えたことをきれぎれに思ひださずにはいられない。人びどがおのの黙して仕事をしているのを見ると、自分はのけものにされてるのじゃないかという考えを禁ずることができない。

場長がなにか声高こわだかに近くの人に話すのを聞くと、来月らいげつにはいるとそうそうに、駒こまば場のうがっこう農学校の卒業生そつぎようせいのひとり技手ぎしゅとして當場とうじょうへくるとの話であった。糟谷かすやはおぼえずひやりとする。それから千葉ちば県の某それがも埼玉さいたま県の某それがも非職ひしよくになったという話をしてゐる。それはみな糟谷かすやと同出身どうしゆっしんの獣医じゅういで糟谷かすやの知人ちじんであった。糟谷かすやはいまの場長の話は遠まわしに自分に諷ふうするのじやないかと思つた。

糟谷かすやはつくづく、自分が過渡期かときの中間ちゆうかんに入用にゆうような材ざいとなつて、仮小屋かりごや的任務てきにんむにあたつたことを悔くやんだ。涙なみだがいつのまにかまぶたをうるおしていた。

糟谷かすやがぼんやりしていると、場長はじめおおくの事務員じむいんは、みんな書類しよるいをかたづけ退場たいじょうの用意よういをする。そのわけがわからなかつたから、糟谷かすやはうろたえてきよるきよるしてゐる。ようやくのこと人びとの口氣くつきできよるの土曜日どようびというに気づいた。糟谷かすやはいまがいままできよるの土曜日どようびということをを忘わすれておつたのだ。

糟谷かすやは土曜と知つて目がさめたようにたちあがつた。なるほどそうであつたな、すつかり忘わすれていた、とにかく都合つごうがえい、それではきよるさつそく上じやうきよう京きやうして、あの人そのに相そ談だんしてみよう、時重ときしげ先生せんせいが心配しんぱいしてくれ、きつとどうにかなる、東京とうきやうにゐることになれば位置いちぢが低ひくても勉強べんきやうができる、なるべく非職ひしよくなどという辞令じれいを受け取らずに、転任てんにん

したいものだ、飯めしくつてすぐとでかけよう。

糟谷かすやはこう考えがきまると、よろめく足をふみこたえたように、からだのすわりがついた。ふみだす足にも力がはいって、おおいに元気づいて家に帰ってきた。

「とんちやんとんちやん」

という声も、いつものごとくにかわいかった。

糟谷かすやが芳輔よしすけを抱だいて奥おくへあがるとぎる碁仲間ごなかまの老人がすわりこんでいる。

「きようは先生、ぜひとも先日せんじつの復讐ふくしゅうをするつもりでやってきました。こうすこしぼかぼか暖あたたかくなってきましたと、どうも家にばかりおられませんから」

老人は糟谷かすやの浮うかない顔などにはいつこう気もつかず、かつてに自分のいいことをいつている。糟谷は役所着やくしよぎのまままで東京へいくつもりであるから、洋服ようふくをぬごうともせず、子どもを抱だいたまま老人と対座たいざした。

「これはせつかくのご出陣しゅつじんですが、じつはそのちよつと東京へいつてくるつもりで……はなはだ残念ざんねんだが……」

「いやそりや残念ですな、日帰りですか」

「今夜こんやは帰れません」

「それじやきようじゆうに東京へいけばいい。二、三席勝負してからでかけても遅くはない。うまくいって逃げようたつてそうはいかない」

農家の楽隠居に、糟谷がいまの腹のわかるはずがない。糟谷はくるしく思うけれど、平生心おきなくまじわった老人であるから、そうきびしくことわれない、かつまたあまりにわかにならわった態度をして、いまの自分の不安心をけどられやせまいかというような、あさはかなみえもあつた。

とうとう二、三盤打つことにした。人間も糟谷のような境遇に落つるとどつちへむいても苦痛にばかり出会うのである。

糟谷はその夕刻上京して、先輩時重博士をたずねて希望を依頼した。

「うむ、いますこし勉強するにはそりやもちろん東京へくるほうが得策だ、位置を望まないというならば、どうかなるだろう、しかしきみたちのように、まにあわせの学問をした人はみなこまつてるらしい、いますこし勉強するのはもつとも必要だね」

糟谷はがらにないおじようずをいったり、自分ながらひや汗のでるような、軽薄なもののいいをしたりして、なにぶん頼むを数十ぺんくり返して辞した。

「これでも高等官かい」

糟谷かすやは自分で自分をあなどつて、時重博士ときしげはくしの門をかえりみた。なに時重さんくらいと思つたときもあつたに、いまは時重と自分とのあいだに、よほどな距離きよりがあることを思わないわけにいかなかった。妻子さいしを振り捨て、奮然ふんぜん学問のしなおしをやつてみようかしら、そんならばたしかに人をおどろかすにたるな。やつてみようか、おもしろいな奮然ふんぜんやつてみようか。ふたりの子どもを妻つまのやつが連れて三里塚りづかへいつてくれると都合つごうがえいが、承知しょうちしないかな。独身どくしんになつていま一度学問がくもんがやつてみたいなあ。子どもはひとりだけだなあ。ひとりのほうは妻つまがつれていくにきまつてる。いちばん奮然ふんぜんとしてやつてみようかな。

糟谷かすやはくるしまぎれに、そんな考えかんがをおこしてみたものの、それも長くはつづかず、すぐまたぐつたりとなつて、時重博士ときしげはくしがいつてくれた「どうとかなるだろう」を頼たよりにわずかに安心するほかはなかった。

よくよく糟谷かすやは苦悶くもんにつかれた。遠いさきのこととはとにかく、なにかすこしのなぐさめを得えて、わずかのあいだなりとも、このつかれのくるしみを忘わすれる娯楽ごらくを取らねば、とてもたえられなくなつた。酒好きさけずならばこんなときにはすぐ酒さけに走るところだが、糟谷かすやは酒はすこしもいけない。

糟谷はとうとう神楽坂に親しい友人をたずねた。そうしてつとめて、自分が苦勞して問題に離れた話に興を求め、ことさらにたわいもないことを騒いで、一晩ざる碁をたのしんだ。翌日もざる碁をたのしんだ。

糟谷はその後日曜たびにかならず上京しておった。かくべつ用がなくても上京しておった。種畜場近郷の農家から、牛がすこしわるいからきてくれの、碁会をやるからきてくれのとききりにいうてきたけれど、いつさい村落へでなかつた。土曜日日曜日をうかがつて、遊びにくるものがあつてもたいていは避けて会わないうにした。

胸中に深刻な痛みをおぼえてから、氣楽な悠長な農民を相手にして遊ぶにたえられなくなつたのである。

糟谷はついに東京に位置を得られないうちに、四月上旬非職の辞令を受け取つた。

五

農商務省にもでた、警視庁へもでた。いづれもあまりに位置が低いので二年とはいられずやめてしまった。そのうち府下の牛乳搾取業者の一部が主となつて、畜

くさんせいせいといふものができた。ちようど糟谷が遊んでおつたをさいわいに、その主任獣医となった。糟谷は以来栄達の望みをたち、碌ろくたる生活に安んじてしまった。愛想よくいつもにこにこして、葉巻きのたばこを横にくわえ、ざる碁をうつて不平もぐちもなかつた。

ただ一度細君に対しては、もはや自分は大きい望みのないことをさらけだし、いままの自分に不足があるならばどうなりともおまえの気ままにしてくれというた。その後は細君から不満をうつたえられても相手にならず、ひややかな気まずいそぶりをされても、へいきに見流しておつた。そうして新小川町に十余年おつた。

糟谷はいよいよ平凡な一獣医と估券が定まつてみると、どうしても胸がおさまりかねたは細君であつた。どうしてもこんなはずではなかつた。三里塚界隈での富豪の長女が、なんだつてただの一獣医の妻となつたか、たとい種畜場はやめても東京へたらば高等官のはしくれぐらいにはなつておれることと思つておつた。ただの町獣医の妻では親類に会わせる顔もないと思うから、どう考えてもあきらめられない。それであけても暮れても鬱うつたのしまない。

なにかといつては月のうちに一度も二度も里方へ相談に行く。なんぼ相談をくりか

えしても、三人の子持ちとなった女はもはや動きはとれない。いつもいつも父母兄弟から相も変わらぬ気休めをいわれて帰ってくる。

運がわるいのだ、まがわるいのだ。若くて死ぬ人もいくらかもある世の中だ。あきらめねばなるまい。あきらめるよりほかに道はない。こう百度も千度もくりかえして、われと自分をいさめてみても、なかなかその日がおもしろいという気になれないのだ。

糟谷は細君がどういふことをしようといやな顔もしないから、さすがに細君もときには自分のわがままを気づいて、

「わたしがなにぶん性分がわるいものですから、わたしも自分の性分がわるいことは心得ていますけれども、どうもその今日をおもしろく暮らすという気になれませんが、始終あなたに失礼ばかりしておりますけれども」

などと遠まわしにわび言をいうことさえあるのである。

種畜場以来この人を知ってる人の話を聞くと、糟谷の奥さんは、種畜場にいた時分とはほとんど別人のようにおもぎしが変わってしまった、以前はあんなさびしい人ではなかったというている。

こればかりは親の力にもおよばないというものの、むすめが苦悶のためにおもぎしま

で変わったのを見ては、実の親として心配せぬわけにはゆかない。結局両親は自分たちの隠居金を全部むすめにあたえて、

「ふたりの男の子をせい一ぱい教育しなさい、そうしてわが世をあきらめて、ふたりの子の出世をたのしめ」

とさとしたのである。糟谷の妻もやつと前途に一道の光をみとめて、わずかに胸のおさまりがついた。長らくのくもりもようやくくすらいで、糟谷の家庭にわずかな光とぬくまりとができた。家畜衛生会のほうもそうとうに収入がある。ただ近隣から、

「糟谷の奥さんは陰気な人ねい」

といわれるくらいのことです。六、七年間はうすあたたかい平穏な月日を経過した。

長男義一は十六才になって、いよいよ学問はだめだときまりがついた。北海道に走って牧夫をしている。三里塚の両親も相ついで世を去った。跡取りの弟は糟谷をばかにして、東京へきても用でもなければ寄らぬということもわかった。細君の顔はよりはなはだしく青くなつた。

十一月も末すえであった。こがらしがしずかになつたと思うと、ねずみ色をした雲が低く空をとじて雪でも降ふるのかしらと思われ、不快ふかいな午後ごごであった。

糟谷かすやは机にむかつたなり目を空くうにしてぼうぜん考えている。細君はななめに夫おつとに對し、両手をそでに入れたままそれを胸あに合わせ、口をかたくとじて、ほとんど人にんぎ形ようのようになつてゐる。この人をモデルにして不満足ふまんぞくという題だいの絵えなり彫刻ちようこくなり作つたならばと思われる。ふたりはしばらくのあいだ口もきかなかつた。

三女の礼子れいこが歸つてきて、

「おとうさんただいま、おかあさんただいま」

とにこにこしておじぎをしても、父も母もはいともいわない。礼子は両親りようしんの顔をちらと見たままつぎの間まへでてしまった。つづいて芳輔よしすけが歸つてきた。両親のところへはこないで、台所だいどころへはいつて、なにかくどくど下女げじよにからかつてる。

「芳輔よしすけのやつ歸つたな、芳輔……芳輔」

「きようはほんとに、なまやさしいことではあなたいけませんよ」

「こら芳輔」

父の声はいつになく荒かつた、芳輔は上目使いに両親の顔をぬすみ見しながら、からだをもじりもじり座敷のすみへすわった。すわったかどするともうよそ見をしてる。母なる人は無言にたつて、芳輔の手を捕えて父の近くへ引き寄せた。

「芳輔……おまえはいま家へきしなに小川さんに会ったろ」

「知りません」

「そうか、小川さんはおまえの保証人だぞ、学校からおまえのことについて、二度も三度も話があつたというて、きようはおまえのことについていろいろの話をしていた。いま帰つたばかりだがきさまといき会はずだが、いやそりやどうでもよいが、きさまはいくつになる」

芳輔はこういわれてすこし父をあなどるような冷笑を目に浮かべる。

「自分の子の年を人に聞かぬたつて……」

「こら芳輔、そりやなんのことです。おとうさんに対して失礼な」

「だつておとうさんはつまらないことを聞くから……」

「だまれこの野郎……」

両親はもう手もふるえ、くちびるもふるえてすぐにはつぎのことばがでない。母はまた

たきもせずわが子の顔を見つめている。

「芳輔、きさまはなにもかもおぼえがあるだろう。きょう小川さんの話を聞くと、小川さんはおまえのために三度も学校へよばれたそうだぞ。きのうは校長まででてきて、いま一度芳輔の両親にも話し、本人にもさとしてくれ。こんど不都合があればすぐ退校を命ずるからという話であったそう。どんな不都合を働いた。儀一はあのとおりものにならない。あとはきさまひとりをたよりに思つてれば、この始末だ、警察からまで、きさまのためには注意を受けてる。夜遊びといえはなにほどこいってもやめない。朝は五へんも六ぺんもおこされる。学校の成績がわるいのもあたりまえのことだ。十五になったら十六になつたらと思つてみてれば、年をとるほどわるくなる。おかあさんを見ろ、きさまのことを心配してあのとおりやせてるわ。もうそのくらいに年になつたらば、両親の苦心もすこしはわかりそうなものだ」

「おかあさんはもとからやせてら……」

母はこのぞんざいな芳輔のことを聞くやいなやひいと声をたてて泣きふした。父も顔青ざめて言句がでない。

「おとうさん、わたしすこし用がありますから錦町までいってきます」

そういつて芳輔は立ちかける。なにごとにも思いきつたことのできない糟谷も、あまりに無神経な芳輔のものいいにかつとのぼせてしまった。

「この野郎ぶざけた野郎だ……」

猛然立ちあがった糟谷はわが子を足もとへ引き倒し、ところきらわずげんこつを打ちおろした。芳輔はほとんど他人とけんかするとき語気と態度で反抗した。手足をわなわなさして見ておったかれの母は、力のこもった決心のある声をひそめて、あなた殺してしまいなさい。殺してしまいなさい。罪はわたしがしよいます。殺してしまってください。もう生きがいのないわたし、あなたが殺されなけりやわたしが殺す……。こうさけんで母は奥座敷へとび去った。……礼子と下女は泣き声あげて外へでた。糟谷も殺すの一言を耳にして思わず手をゆるめる。芳輔は殺せ殺せとさけんで転倒しながらも、真に殺さんと覚悟した母の血相を見ては、たちまち色を変えて逃げだしてしまった。

礼子は外から飛び込みさまに母に泣きすがつた。いっしょけんめいに泣きすがつて離れない。糟谷も座につきながら励声に妻を制した。隣家の夫婦も飛び込んできてようやく座はおさまる。

糟谷はまだ手をぶるぶるさしてる。礼子はただがたがたふるえて母を見守っている。母

はほとんど正氣を失つてものすさまじく、ただハアハア、ハアハアと息をはずませてる。はつきりと口をきくものもない。

「ようやくのこと糟谷は、

「増山さん（となりの主人）いやはやまことに面目もないしだいで、なんとも申しあげようもありません」

「いやお察し申しあげます、いかにもそりや……まことにお気のどくな、しかし糟谷さんあまり無分別なことをやってしまつては取りかえしがつきませんよ、奥さんはよほど興奮していらつしやるから、しばらくお寝かしもうしたがよろしいでしょう」

「どうも面目ありません」

ほとんど人のみさかいもないように見えた細君も、礼子や下女や増山の家内から、いろいろなぐさめられていうがままに床についた。やがて増山夫婦も帰つた。あとへ深川の牛乳屋某がくる、子宮脱ができたからというので車で迎えにきたのである。家のありさまには気がつかず、さあさあといそぎたてるのである。糟谷はとつおいつ、あいさつのしようにも窮して、いたりたつたりしていた。

子宮脱はかれこれ六時間以上になるといふ。いちばん高い牛だから、気が気でない

という。糟谷はいかれないともいえず、危険な意味ある妻を下女と子どもとにまかせてでるのはいかにも不安だし、糟谷はとほうに暮れてしまった。おりよくもそこへ西田がひよつこりはいつてきた。深川の乳屋も知ってる人と見え、やあとあいさつして遠慮もなくあがつてきた。

「うちでしたな、えいあんばいであつた。じつはころあいのうちが見つかつたもんですからな」

西田の声がして家のなかの空気は見るまに変わつてしまつた。陰鬱な空気が見るまにうすらぐような気がした。糟谷は手短にきょうのできごとから目の前の窮状を西田に語つた。

「うん、きみもかわいそうな人だな、なるほど奥さんも無理はない。ああ奥さんもかわいそうだ」

涙もろい西田は、もう目をうるおした。礼子もでてきて黙つてお辞儀をする。西田はたちながら、

「子宮脱ならなるだけ早いほうがいいでしょう。糟谷くん職務はだいじだ。ぼくが留守をしてあげるから、すぐと深川へでかけたまえ」

西田はこういい捨^すてて、細君の寝^ね間^まへはいった。細君も同^{どう}情^{じょう}深い西田の声を聞いてから、夢からさめたように正^{しょう}氣^きづいた。そうしてはいってきた西田におきて礼^{れい}儀^ぎをした。「いま糟谷くんからかいつまんで聞きました、もうひとすじに思いつめんがようござい
ますよ」

細君は、

「ありがとうございます」

と細い声でいってさんさんと泣^なくのである。

「それじゃ西^{にし}田^ださんちよつといつてくるから頼^{たの}む」

と糟^{かす}谷^やは唐^{から}紙^{かみ}の外^{から}から声をかけてでてしまった。

西田は細^{さい}君^{くん}に対し、外^{そと}手^て町^{まち}に家^やのあつたこと、本^{ほん}所^{じょ}へ越^こしてからの業^ぎ務^むの方^{ほう}法^{ほう}、そのほかここの家^や賃^{ちん}のとどこおりまで弁^{べん}済^{さい}してあげるといふことまで話して、細君をなぐさめた。

子どもをりっぱにして自分がしあわせをしようと思つても、それはあてにならないから、なんでも人間のしあわせといふことは、自分にできることの上^{うへ}に求めねばならぬ。とかく無理^{むり}な希望^{きぼう}を持^もつてると、自分のすることにも無理^{むり}ができるから、無理^{むり}とくるしみを求め

るようになるなどと話されて、細君もひたすら西田の好意に感じて胸が開いた。

あかしのつくころに糟谷は帰ってきた。西田は帰ってしまうにしのびないで、泊まって話しすることにする。夜になって礼子や下女の笑い声ももれた。細君もおきて酒肴の用意に手伝った。

糟谷は飲めない口で西田の相手をしながら、いまいつてきた某氏の家の惨状を語った。

ひとりむすこに嫁をとつて、孫がひとりできたら嫁は死んだ。まもなくむすこも病気に なった。ちようどきよう某博士というのがきた。病気は胃癌だといわれて、家じゅう泣きの涙でいた。牛のほうはぞうさな いけれど、むすこは助かる見込みがない。おふくろが前掛けで涙をふきながら茶をだしたが、どこにもよいことばかりはないと、しみじみ糟谷は嘆息した。

西田はあいさつのしようがなく、

「ぼくのような友人があるのをしあわせと思ってるさ」と投げだすようにいう。

「ほんとにそうでございます」

と細君はいかにもことばに力を入れていった。芳輔よしすけは、十時じゅうじごろに台所だいどころからあがつてこつそり自分のへやへはいった。パチリパチリと碁ごの音は十二時すぎまで聞きこえた。

青空文庫情報

底本：「野菊の墓」ジュニア版日本文学名作選、偕成社

1964（昭和39）年10月1刷

1984（昭和59）年10月4刷

初出：「中央公論」反省社

1909（明治42）年3月1日

※表題は底本では、「老獣医《ろうじゅうい》」となっています。

※三女に対する「礼」と「礼子」、長男に対する「義一」と「儀一」の混在は、底本通りです。

※底本巻末の編者による語注は省略しました。

入力：高瀬竜一

校正：岡村和彦

2016年6月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

老獣医

伊藤左千夫

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>